

# 平安京右京三条一坊六町跡（第3調査区）現地説明会資料

平成23年（2011）12月10日

佛教大学・（財）京都市埋蔵文化財研究所

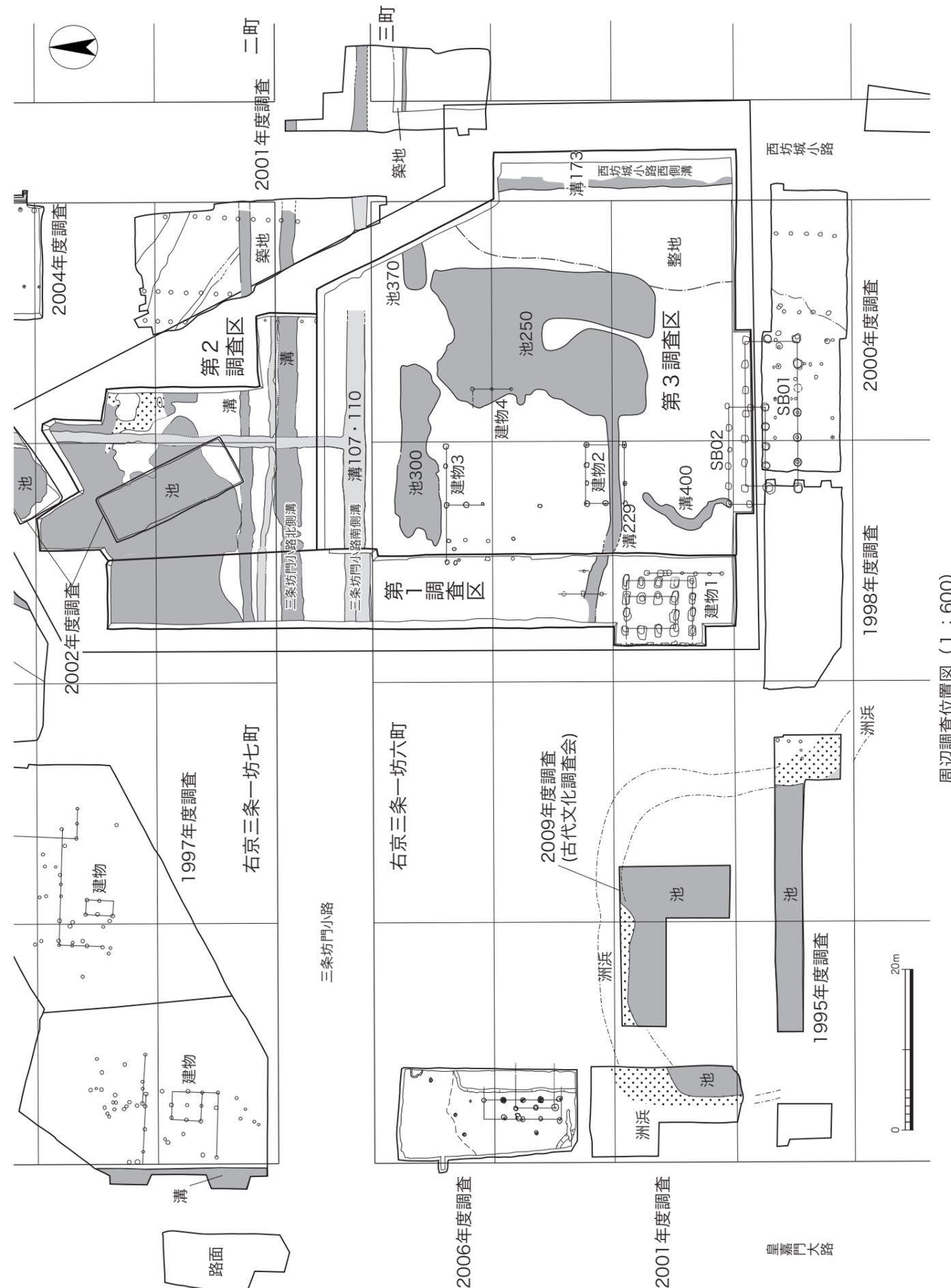
1 経過 調査地は平安京右京三条一坊六町の北東部にあたります。調査は、佛教大学二条西キャンパス建設予定地として、本年4月に第1調査区から開始しました。8月初旬からは第3調査区の調査を実施し、平安時代前期（9世紀）の池跡・建物跡を検出しました。また、同時代の遺物も豊富に出土したことから、六町の北東域の状況が明らかになってきました。

2 遺構 建物SB01・SB02は2000年度に東西道路建設に伴う調査で検出し、今回両建物の北側柱筋を検出できました。SB01は南北2間で東西6間（柱間は、南北11尺、東西10尺）、SB02は南北2間で東西5間（柱間は南北9尺、東西8尺）の規模をもちます。建物2は南北2間、東西3間で柱間は8尺（約2.4m）ですが、2箇所柱位置が検出できず、また溝229の真上に建つことから、やや特異な建物であったとみられます。建物3は北西部に散在する柱穴から想定しましたが、規模・構造は確定できていません。また池250の西岸には礎石2基と抜取穴らしき1基が南北に並んでおり、西側から池に張り出す建物が想定できます（建物4）。

池250は、ほぼ長方形を呈します。中心のやや南には地面を削り残した中島があり、南岸から土手状の高まりが延び、中島と接続しています。池跡の検出規模は東西約18m、南北約28mで、深さは最大0.8mあり、底は凹凸が顕著です。西岸から9世紀後半に属する土器、土製品、石製品、木製品、金属製品などが大量に出土しました。また、この池の南西部には溝229が取り付け、池の上水を西方へ排水していました。池250の北西部と北東部で検出した池300・池370は、9世紀前半の遺物が出土しており、池250より早く埋没したようです。溝400は幅約1mの範囲に遣水状の小礫が認められることから、遣水の底部が残存したものとみられます。溝107・溝110は三条坊門小路南側溝にあたりますが、平安時代後期と江戸時代前期の遺物が出土しました。溝173は西坊城小路西側溝に該当し、西半分のみが残存していました。南東部の「整地」は、湿地が9世紀初頭に埋められたものです。

3 出土遺物 池250からは、土師器、黒色土器、白色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器などの他に、土製品（土錘）、石製品（水晶製の軸端・碁石、石帯、硯）、木製品（櫛・下駄・車輪形）、金属製品（銅鏃・鉄鏃・鉄釘・毛抜）、銭貨（長年大寶=848年初鑄、饒益神寶=859年初鑄、貞観永寶=870初鑄）、瓦類など、9世紀後半代の遺物が整理箱に約200箱出土しました。様々な種類が揃っており、高級陶磁器類が多いこと、仏器とみられる珍しい器形があること、墨書土器が多いことが特徴です。墨書土器では、土師器高杯に「三条院釣殿高杯」、別個体には「政所」と記したものがあり、当該地の邸宅名との関連で注目されます。

4 まとめ 右京三条一坊六町は、『拾芥抄』西京図には「西三条」とあり、右大臣藤原良相（813～867）邸の推定地とされてきました。良相邸は『日本三代実録』には「西京三条第」、あるいは「百花亭」と記載されます。また良相邸には、良相の姉である皇太后順子（仁明の皇后、文徳の生母）が貞観元年（859）から約1年間にわたって滞在しました。池250から出土した遺物に高級品が多いことや「三条院」「政所」と墨書された土器は、皇太后御所に関連する可能性が高いといえます。この池250の西岸からは、多くの遺物が投棄された状態で出土しましたが、藤原良相家は貞観八年（866）閏三月に起きた「応天門の変」以後は衰退するとされており、それを裏付ける成果としても注目されます。



周辺調査位置図（1：600）

